
さん じゅー しっ!

アプリリウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さん じゅー しっ！

【Nコード】

N4001Z

【作者名】

アプリリウス

【あらすじ】

『私たちと一緒に、学院の平和を守ろうではないか！』
そんな一言で始まった俺、御谷安継の新しい日常。

学院の平和を守るため。

真の銃士を目指すため。

今日も銃士部は活動中！

「てか、まともに活動した日ってあったっけか……？」

ぶるるーぐ！（前書き）

どうも、期末考査が終わり浮かれているアプリリウスです。

諸事情によりストパンの二次創作を削除&新ストーリー考案中のワタクシですが、以前から考案していたオリ小説を投稿させていただきます。

……あ、ストパンの間に合わせじゃないですよ？マジで書いてますよ？

ぶるるーぐ！

俺は今まで特に何もしてこなかった。

幼稚園や小学校の頃に皆も聞かれたことだろう。

『将来の夢は？』

『仮面ライダー』、『宇宙飛行士』、『電車の運転士』……例を挙げるとざっとこんな物だろうか。
もちろん男の子のだが。

俺はその質問に対しこう答えた。

『未定です。なれるかどうかも解らないのに、夢なんて語っても意味ないでしょう？』

つくづくムカツク子供だったと思う。俺が教師なら張っ倒している。
とにかく俺は何もしてこなかった。

クラスの委員長になる事もなく、これといった部活にも入らず、親友を作ったりも、彼女を作ったりもせず無難に生きてきた。
いや、『無難な生涯』と思ってきた。

高校に入っても同じように生きるつもりだった。

俺が通っている私立アルマーニユ学院は『博愛』『友情』などを校訓にしている。

なんでそんなところ行ったかって？学費が安いからさ……。
後は、名前にカタカナが入っているからカソリックの学校……とい
う訳もなく、校則が厳しくもないし、生徒の自主性を重んじる学校
だったからかな。

まあ、そんなわけで 学院に入学したのだが、その時の俺は思いも
しなかっただろう。

自分が友達を作り、部活に……しかも『銃士部』とかいう良く分か
らない部活に入り、面倒な奴らとかかわる事になるとは……。

ぶろろーぐー！ 『ちゃんじゅーしゅー』

「……誰に話し掛けいるのだ？」

「あゝ、あれかゝ、エア友って奴か？」

「違えよ!!！」

ぶるるーぐ！（後書き）

どうでしょうか……（不安）。

元ネタは三銃士です。歴史の授業中に考えました。

……その時の授業はアメリカの独立戦争だったんですけどね。

第一話！

あゝたゝらしいゝあゝさがきゝたゝ（前書き）

どうも、友達から『丁寧な変態』と呼ばれたアプリリウスです。
何なんでしょうね、丁寧って。

変態に丁寧も糞もあったもんじゃないと思うんですけどね。

第一話！

あーたーらしいーあーさがきーたー

画面の前の皆、こんにちわ。もしくはこんばんは。

俺の名前は、御谷安継。みたにやすつぐ

私立アルマーニュー学院に通う高校二年生だ。

……前もって言うておくが、俺はチート主人公でもないし、転生者でもない。おまけに、特殊能力もない。

パートナーポケオンを連れて旅にも出ないし、金髪ロリツインお嬢様が主な貧乏執事だったりもしない。

いいか、そういうのは期待するな。一切期待するな。

俺は（ここ重要）普通の高校生だ。それだけは確かだ。

今日は月曜日。一部の奴らは『一週間で最も忌々しい日』とか言ったりするが、俺は断じてそんなことは言わん。言っただろう？俺は普通の高校生。極端にバカだったり、変態だったりしない。

まあ、そういう知り合いなら腐るほどいるが。

「オーツス、タニアン！」「おや、安継ではないか……」

ほら、噂をすれば何とやら……。

「（グ）。。（）オイオイ、朝からテンション低いなあ。」

「聞こえていないのではないだろうか……？」

「おー、そうかも。じゃ、もう一度……オーツス!!」
「うっせえ！耳元で叫ぶな！」

早くも静かな朝のひと時がぶち壊された。

「無視したんだよ！無視したんだから、大声で叫ぶなよ！」
「無視すんなよ」。朝から元氣ねえなあ。そんなんじゃ、一時限目から寝ちまうぞ！」

「俺は寝たことない！むしろ、寝るのはオマエだ！」

「あれ、そだっけ？」

「ああ……、そうだと思うぞ。」

バカばっかだ。

ちなみにやけにテンションが高いバカ？は角館慶太、かくのたてけいたやけに言葉が芝居がひのはらみずきかっているバカ？は檜原瑞。

……別に皆に説明してるわけじゃない。むしろこの二人バカ共の事は忘れて欲しい。

「安継よ、男のツンデレとは醜いものだよなあ……。まあ、俺は不思議系ロリのほうが好きなのだが。」

「お前の好みは聞いてない！っーか、俺は喋ってすらいない！」

「ハイハイハイ（。。（ノ、俺はね、ロリ巨乳かな！」

「お前黙れ！」

「バカめ！ロリっ子に『巨乳』の二文字は有るか？いや、無い！」

「な、何、反語だと……!？」

なぜかオタ談義が始まってるし。……なんです。

しかも、コイツら熱い談義をしながら犬のフンをよけ、転びそうになっっているおばあちゃんを助け、信号でもきちんと止まっている。

そんなもって、二人の口論をBGMに歩道を歩き、信号を渡り、坂を上り、e t c ……していたら学院の前でした、と。

「むづ、さすがは角館……。『サウザンドエロ千の性癖の男』の名は伊達ではないな……。」

「だが、これで理解したろう！不思議系の真の力を！」

「くそう、不思議系を舐めてた……ぜ（がくつ）。」

「さらばだ、我が宿敵よ……。安らかに眠れ……。」

何だよサウザンドエロって！！『サウザンドマスター千の呪文の男』かよー！！
んでもって、めざすのは『マキステル・エロ立派な変態』かよー！！

「と、まあ、じゃれ合いはこんな物にしておいて……。」

「今までのじゃれ合い!？」

「ああ、そうだが？」

檜原は『当然だろう?』という顔をする。

うん、コイツらに構ってしまった俺が馬鹿だった。

己の行いを恥じつつ校門をくぐった……。のだが。

「よーう、御谷！」

「………突如現れた謎バカの人物。コイツ、俺の名前を知っている!?
?。果たしてその正体とは!?!次回、『日常への訪問者』。君は、
時の涙を見る。」

「無理やり話を終わらせようとすんな!!まだ1500文字超えて
ないよ!!!ってカルビの『バカ』って何だよ!?!それから、次回の

題名何!? Z? Zガンダムなの? 私好きだよZ!! 面白いよね!!
特にカミ○ユのあの場面での (r y …… 」

このバカ? の名は中森明日斗なかもりあすひ、性別は女。以上。それ以上は何も言
わねえ。

「仕方ないだろう中森女史。安継はLV5の厨二病患者だ、日常の
全てが厨二なのだろう……。」

「朝起きて登校しようとしたら、厨二病に会う。これって日常だね
?」

「聞くなよ!」

「校門の前で喧嘩すな!」

ゴチン!!! x 2

「ギヤアアアアア

(——。)

!

!!!!!!!!!!!!!!」

突如、バカ? と俺の頭に鉄拳が落ちる。

「『効果は バツグン だ!』」

「全く、まーたお前らかよ……。」

この方は、取手川瀧さんとりでがわたき。

中森さん
部長を本気でぶん殴れる人物だ。

つてか幼馴染らしいよ。この二人。

「つてーな、瀧! 私がカミ○ユについて語ってるんだから邪魔すん
なよ!」

「うん、それは教室でやるつか。聞いてやるから。」

「お、マジ!？」

「うん、マジ。」

「ならさならさ、瀧はカオーユとク○トロさんどっち好き？」

「俺はハ○ーン派かな……」

「バツ、バーロー!ハマ○ン様』って呼べよ!」

「ああ、ゴメンゴメン……」

瀧さんスゲエ……。部長のマシガントークに惚えつつ、後者に向かって歩きながら、単語帳見てる……。

「さすがは取手川氏……。女史への対応に関してはエースだな……。」

「まあ、クラスは3年間一緒に、席も3年間隣どうし。家も近所なら、上手くもなるだろうさ。」

「え、家が近所って誰と誰が?」

「は?いや、部長と瀧さんが。」

「……マジで?」

「うん。」

「知らなかった……orz」

普段から『リア充氏ね!』とか言ってるくせに、妙なところで鈍いよな、このバカ……。
角館

「それより二人とも。もう8時30分過ぎているぞ?」

「「彖?」「」

おれたちは、きょう、ちこくしました。まる。

第一話！

あゝたゝらしいゝあゝさがきゝたゝ（後書き）

第一話から早々に幾つものネタを使いました。

『ついカツとなってやった。反省している。』

いやゝ、いいですよねハマーン様。美しいよハマーン様。

ちなみに弟はシャア派なんですよね。

特に、クワトロの時間が一番いいとか。

まあ、人それぞれだしね。

知り合いにはグレミー派とかいうのもいますけどね。

でもやっぱりアクシズでの一番はプルだと、ワタクシ思う。

かわいいよプル、ああプル。プルプルプルプル（ry

すみません、調子乗りました。

さて、第二話についてなのですが試験休みがあるのでその時に書くかなと思っています。

第二話！

トム・クーズ高いところが好きなんだってな（前書き）

どうもアプリリウスです。

期末試験、無事（？）に終わりました。

後は冬休みまで一直線だぜ！

そんなテンションで第2話書き上げました。どうぞ。

第二話！

トム・クーズ高いところが好きなんだってな

突然だけど、朝のHRホムルームって重要だと思うんだ。

教師からの連絡とか、行事についての話し合い。

それらもHR中に行われる。

だから俺はHRも『授業』として見るべきなんじゃないかと思っている。

そんな時間なのに……

「こちらスターライト。敵拠点への侵入に成功。オーバー。」

「こちらコーナーだぜ！安全を確認次第、俺達も拠点に侵入するつもりだ。オーバー。」

「こちらスターライト。コーナーよ、了解した。オーバー。」

俺達はHR中の教室への侵入を試みていた……。

第二話！
トム・クーズって高いところが好きなんだってな

「こちらコーナー。おい、タニア……じゃなかった。ハイバレーさつきから何もしゃべってないけど大丈夫か？オーバー。」
「……なあ、俺達はなんでわざわざこんな面倒くさい方法で教室に入ろうとしているんだ？」

「こちらスターライト。ハイバレーよ、ちゃんとコードネームを言っってから話せ！オーバー。」

「いや、不通に入って申告したほうがいいんじゃない？」

「ふっ、それではつまらない！どうせなら学園生活は楽しく過ごしたいだろう？」

「ああ、そうだよな。何でも楽しいほうがいいよなあ。でも、学園生活を楽しく過ごしたいなら、教師オレにとっちめられる様な真似はしないほうがいいと思うんだがなあ……。」

その声は俺達3人が発したのではなく、俺達の真後ろから聞こえてきた。

「残念だな、ミッション失敗だ。」

「く、鷹崎教諭たかきか……。」

檜山が悔しそうに唇をかむ。

「おっと、ちなみにこの方は鷹崎霧羽教諭たかきむつ。俺達が所属している2年A組の担任。金髪で180cmを超す身長、面倒見の良さ故に、生徒たち（主に女子）に人気。ちなみに金髪なのは父親がイギリス人だかららしい。鼻の中央に真一文字に走っている傷痕がトレードマーク。」

「檜山、誰に言っただ？」

「画面の前の皆さんに。」

「わかった。ツッコまないでおこう。」

このように、空気も読める。

「っと、話がずれたな……。さて、遅刻をしただけではなく、教室にこっそり忍び込もうとしたんだ。タダで済むわけねえよなあ？」

どこのエース様だ、とはツッコまない。

「そうだなあ……………、よし決めた。」

「お前ら一人ずつ、何か一発芸やれ。」

「……………は？」

何を言ってるんだろう、この教師は……………。

「了解した！不肖ながらこの檜山瑞、一番手に角館を推薦しようではないか！」

「オレかよ！？」

檜山に背を押され、角館が教室の一番前に立ち、クラス中がそれを見つめている。

「い、行きますー！」

（ ） ・ ・ （ ） ゲッツー！」

「……………」

「まんまパクリの上に、時代遅れ。最悪だな……………」

そう檜山がつぶやくと……………。

「だ、だから言ったじゃないですかあああっ!!。*。
。。。。。(ノウワアアアアン」
+

角館は走って教室を出て行ってしまった。

「あー、うん、HRはここまで。お前ら、今日も頑張っ
てけよ!」
「」
「」
「」

その後の教室に重い空気が漂ったのは言うまでもない事である。

第二話！

トム・クーズ高いところが好きなんだってな（後書き）

今気づいた、冬休み中も講習があるんだった……orz。

数学がヤバイ。マジでヤバイ。

ワカンナイヨ、ガイブン・ナイブンナントテ……。

鷹崎教諭はガンダムSEEDのムウ・ラ・フ○ガをイメージにしました。

モロバレだと思っけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4001z/>

さん じゅー しっ！

2011年12月20日01時50分発行